

ああ、相談業務

～真美ちゃんの話～

6

かうんせりんぐるうむ かかし

河岸由里子（公認心理師/臨床心理士）

真美ちゃん家族

真美ちゃんは小学3年生で、父方祖父68歳無職、祖母66歳無職の三人暮らしで、市営住宅で生活していた。動物は不可であるが、猫が3匹飼われていた。

必要なものも揃えられていない。電話は無いので自宅を訪ねるが、祖母と会っても話が進まず、家は酷い状態だ」とのことであった。子どもがいる家庭でもあるので、家庭児童相談室にと相談が上がった。今であれば、スクールソーシャルワーカーの出番であろうが、その当時、その様な職種は無かった。

相談の始まり

真美ちゃんの相談が上がってきたのは夏休み前の暑い日であった。小学校の教頭から、「学校にはほぼ登校しているが、かなり生活が厳しいのか、衣服も汚れていて、匂いも酷いという。勉強もかなり厳しいし、何より食事がきちんとあっているのか心配だ。給食はしっかり食べているが、給食費は滞納中。諸費も殆ど支払われていない。

この家庭の情報

さて、この家庭について、実父母はどうなっているのかと調べてみた。赤ちゃんの時の様子を保健師に問い合わせしてみると、古くからいる保健師がこの家庭のことを知っていて、記録を書庫から探し出し、更に記憶をたぐりよせてくれた。

妊娠届出時実母は20歳、実父は36歳でまだ籍は入っていなかった。実母は見るからに水商売

という感じで、煙草もお酒もやめておらず、妊娠を喜んでいる風でも無かったそうだ。だからこそ印象に残っているのだろう。妊娠を継続するのか心配なケースだったという。一方実父の方は36歳にしては頼りない感じで、職業は建築関係となっていた。子どもが出来たことに関しては嬉しそうだったという。結局本児が生まれる前に入籍し、父方祖父母の市営住宅の近くの小さなアパートに居を構えた。赤ちゃんが生まれるまでも、妊婦健診が飛び飛びだったり、かなり心配なケースで保健師管理になっていた。赤ちゃんが無事に生まれるまで、訪問をしたり、電話をしたりしたが、居留守を使われたりで中々連絡も取れなかったが、何とか自宅分娩にもならず、無事に病院で出産することが出来た。

入院中の様子も赤ちゃんの面倒を看ようとせず、看護師に促されてしぶしぶ母乳をあげたりしていたし、母親教室でも不貞腐れた様子で、いやいや赤ちゃんの世話をしていた。父親はちょくちょく見舞いに訪れ、赤ちゃんを抱いたりして喜んでいたので、父親はまだ赤ちゃんに対し気持ちがあがるが母親は全く赤ちゃんに愛着が無いとの連絡票が来たそうだ。そこで母親が入院中に保健師が病院を訪問したこともあったという。

実母の実家は遠方で、妊娠したことも結婚したことも真美ちゃんを産んだことも一切伝えておらず、絶縁状態とのことで、退院後は、父方祖母が面倒を看ることとなった。赤ちゃん訪問も祖父母宅で行われた。その当時祖母は働いたことはなく、祖父が当時働いていて、生活は低所得ではあるものの、そこそこ生活できていたし、実父も建築関係で働いていた。

予防接種や健診などは全て祖母と実父とで行っていて、実母が来ることは無かったという。赤ちゃんを看ない実母は恐らく祖父母との関係も悪かったのだろう、真美ちゃんが3ヵ月になるころには家に居つかなくなりちょくちょく外泊するようになった。実父との連絡も途切れがちになって、結局6ヶ月になるころには全く帰ってこなくなった。その後数ヶ月が経ち、ある日離婚届

が送られてきたそうで、結局実父は離婚を決意し、真美ちゃんを引き取って祖父母宅で同居となったという。

その後1歳半、3歳児健診では特に問題なく、祖母が来て受けて行ったという。真美ちゃんは幼稚園を活用し始めたところで記録は終わっていた。祖母は大人しい人で、了解性はあまり高くないが真美ちゃんを可愛がっているという記録もあったという。

色々あったが何とか安定したというのがここまでの印象であった。それが今の状況にいたったのは一体どうしてなのか？先ずは祖母と会うことが必要と考え、祖母との面談に向けて動くことにした。

相談経過

祖母との面談を意図して訪問をしても、祖母と会えない日が続いた。家は市営住宅ではあるが、戸はほぼ壊れていて開くものの、中は乱雑でゴミ屋敷状態。人が住んでいるとはとても思えないほどひどい状況であった。いつもであれば、訪問したこと、又来ることを書いたお手紙を玄関の戸に挟んだりするのだが、戸が壊れていて挟むこともできない。物が散乱している玄関の上がり框に、物をちょっと除けて置いてみた。きっと気付かないだろうとは思いますがそれしか仕方がない。この家は電話も無いので、他に方法が無いのだ。生活保護世帯ではないかと思って調べてみても、それもなく、市営住宅の管理の方に聞いても、家が酷い状態だとの話はあるようで、立ち退きの話も出ているそうだが、同じく連絡がつかないのでとのことだった。

結局夜ならいるかと思って行っても、真美ちゃんすら見当たらない状況で、一体どこで何をしているのかと心配になった。学校には行っているの、どこかに泊まっているはずである。祖母も祖父も真美ちゃんも誰にも会えないの

だ。実父はどうなっているのか？お隣さんに聞くわけにも行かない。そこで地域の民生委員・児童委員さんに聞いてみることにした。

民生委員・児童委員からは、祖父は体を壊して入院しているのではとの話が聞かれた。病院は A 病院らしいと。また、祖母はいるが、実父は見たことが無いという話も聞いた。学校に確認して真美ちゃんは一体どこに帰っているのか確認してもらおうと、ちゃんと家に帰っているということで、訪問しても誰もいないのではなく、出てこないだけだということが分かった。民生委員さんから祖母は時々公園などで見かけられるという話も聞いた。挨拶をすれば返してくれるし、何か困っていないかと聞いても「大丈夫です」と言っていたという。本当に大丈夫なのか？公園で一体何をしているのか？疑問に思ったが、こうなれば真美ちゃんが帰る時について行って祖母と会うしかないと考え、帰宅時間に合わせて学校から真美ちゃんと一緒に家に行った。

真美ちゃんは屈託なく話をしてくれて、家は電気もガスも水道も使えないから、夜は蠟燭で生活しているし、公園に行って用を足したり、水を汲んだりしていると聞いた。こんな状況になるまで放っておかれた家庭があったのかと愕然とした。まずは話を聞かねばならない。その日、漸く祖母と会うことが出来た。真美ちゃんが祖母と合わせてくれたのだ。

祖母は顔色も悪く、やせ細った、弱弱しい感じの人であった。話を聞いて行くと、真美ちゃんの実父は、真美ちゃんが 5 歳くらいの時に失踪したそうで、失踪届などは出していないとのこと。きっとどこかで彼女でもできて暮らしているんだろうという。お金も入れてくれないそうで、今の生活費は、祖父の年金だけだが、その祖父が脳梗塞で倒れ入院中とのこと。生活保護の申請なども全くされておらず、お金がない中で祖父の入院費、治療費だけで手いっぱい、家賃も払えず、水道代も電気代も払えなくなったという。「お恥ずかしい話ですが・・・」

が口癖のように出てきて、公園でもらい水をしたり、ゴミ箱をあさって、食べ残しや飲み残しを捨ったり、山に山菜を取りに行ったりして何とか過ごしている。真美ちゃんは給食があるので学校がある時は良いが、無い時は本当に食べるものも無く、せいぜい一日にパン一個という状況だという。今日ゴミあさりをしたら、靴が捨ててあったので、まだ使えると思って捨てきたと嬉しそうに話していた。

祖母に祖父の状態を聞くと、肺炎も併発しているようで状態は良くないとの事。毎日病院に見舞いに行くが、話も出来ない。全部祖父に任せてきたので何をしてもよいかわからないと訴えた。

先ず真美ちゃんについてはは食事がきちんとあたらないのであれば、児童相談所に預けてはどうかと伝え、その間に祖母は生活保護の申請をしよう。そのお手伝いはするからと伝え、早速児童相談所に本児の一時保護をお願いし、一方で生活保護の申請に付き添い、手続きを行った。

祖母も力のない人で書字もかなり酷く、知的障害の可能性が感じられ、精神科受診もと次々進めて行った。

手続きを進める間に祖父の状態が悪化し、亡くなってしまった。祖母は一人残され、この先どうして生きて行けばよいのかと悲嘆にくれた。葬儀も市と相談して直ぐ火葬にし、火葬場にも付き添ってお骨にし、祖母はこのお骨を抱いて市営住宅の自宅に戻った。寡婦になり年金を受け取れるようにはなったが、大した金額でもなかった。その後生活保護の申請が通ったものの、家は住める状態ではなく、今後の住まいを考えねばならない。精神科受診の結果知的障害であることがわかり、手帳を申請し、障害者年金も申請し、今後の生活を一人で行うのは心配でもあったので、福祉課とも相談し、祖母を知的障がい者施設に入所させる方向で進め、真美ちゃんは児童養護施設の活用とし、その様に措置されて終結となった。

まとめ

相談を受けていると、電気やガスを止められたと聞くことも度々あるが、水道を止められるのは余程である。水道だけは温情で最後まで通しておいてくれ、少しでもお金を払えば又使えるようにしておいてくれる。電気やガスを止められて、冬のさなかに毛布にくるまっている家族も見てきたし、蝋燭を灯している家族も見てきた。でも本ケースほどの貧困は初めてであった。

学校では問題と感じていて、民生委員・児童委員は知ってはいるがそこまで問題があるとは感じておらず、市営住宅の担当も家が汚いことも、家賃の滞納についても解っていたという状況で、各機関が情報共有をしていない中で、問題がどんどん悪化したケースである。

このケースでは、真美ちゃんのその後が心配ではあるが、ゴミをあさって生きているという状況よりはなんぼかましだろう。母親に捨てられ、父親にも捨てられ、祖父は亡くなり祖母とも離れ、たった一人きりになってしまった本児が、児童養護施設で安心、安定の生活を送れたとすれば何よりである。

低所得者は多く、貧困にあえいでいる家庭もかなりの数見受けられる。勿論生活保護を受ければよいという話でもないが、生活保護を受けることも知らない人もいるし、受けられないと思いついでいる人もいる。知的な問題を抱えた人がこのケースの様に取り残されている実情に、我々支援者はアンテナを高くして対処していかなければならない。生活保護は申請をしなければ受けられないし、申請をしても受けられないこともある。我々支援者が、支援について熟知しておくこと、情報を集める方法についても、様々な伝手を持っている事、介入の方法についても、あの手この手で考えられる事など、柔軟性や臨機応変さはどのようなケースでも必要である。どの様なケースに出会っても、支援の方法を考えられるような支援者でありたいものだ。